研究課題　史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　渡辺美季（東京大学大学院総合文化研究科・准教授）

　所内共同研究者　須田牧子・黒嶋敏 ・岡本真

　所外共同研究者　荒木和憲（国立歴史民俗博物館・准教授）・辻大和（横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院・准教授）

研究の概要

（１）課題の概要

　東京大学史料編纂所には、明清時代中国の公文書ならびにその関連文書が複数所蔵されている。それらは中近世東アジアの国際関係を読み解く際の貴重な史料であり、中近世日本における中国公文書の社会的価値を具体的に検討し得る好素材でもある。すでにある程度、基礎的データの作成や国内の類似文書のデータ集成が進められているが、これらの文書を古文書学的に位置付けるためには、明清国内における形式・作成・発給過程についての制度的研究と、実際に発給された類似文書との比較検討が不可欠である。  
そこで本研究ではこれらの文書について、①形式・作成・発給に関わる中国側の諸規定を調査・把握し、②それらの規定と編纂所の所蔵史料との対照調査を行った上で、③台湾の中央研究院・国立故宮博物院において類似文書（原本）との比較検討を実施する。これにより、規定と実態の両面からそれらの文書の古文書学的位置づけを明らかにし、東アジア地域で共有し得るレベルでの「史料の研究資源化」を目指したい。

（２）研究の成果

　2019年度メンバーに加え、朝鮮史の専門家も加わったことで、明清代中国・朝鮮・日本といった同時代東アジア諸国の発給文書をより複眼的な視野で見通すことが出来るようになり、2019年度の台湾調査等を踏まえて、韓国調査の対象と意義も鮮明になった。調査が出来なかったのは残念であるが来年度を期したい。また2020年度の研究会での議論を生かし、現在、中央研究院所蔵の明清発給文書を中心に、簡単な解説を付したカラー刷での成果報告書を準備中である。